PROJECT

ポストコロニアルになるとは？

文
太田好信

共同研究 ● 政治的分類──被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する（2014-2017 年度）

テーマの翻訳

本共同研究の表題は、人種という概念がどのように捉えられているのかという疑問に対し、人種化（支配の対象として集団化）された人びとの視点から、W.E.B. デュボイス（1940: 640）が与えた回答に着想を得た。彼は、黒人が意識する肌の色などの外見の類似はバッジとしての機能しかなく、本質的絆は奴隷制、差別と侮蔑の歴史の共有にあるという。デュボイスは、人種を自然界の分類ではなく、権力の歴史を反映した政治的分類として認識していた。

一読する限り、デュボイスが示した回答は人種に関する限定的な介入に過ぎない。しかし、本共同研究では、この回答を各参加者が、多様な文脈へと導き、その意味を翻訳し、新たな問いを立て、それらに回答を見出すよう努めてきた。しかし、ときには翻訳結果は袋小路に陥った。その原因は代表者の課題設定の方に問題があるからだという厳しい批判もあった。毎回、熱気を帯びた議論を呼んだ批判のいくつかを、次に紹介したい。

人種化されてきた者たちの視点から見れば、人種とエスニシティという考え方に差異はあるのか。人種はＦ・ボアズらにより批判されて久しく、人類学においていま取り上げるテーマとして適切なのか。本研究の副題は「被支配者の視点から」とあるが、多様で錯綜するエイジェンシーを生むコロニアリズムの歴史において、被支配者というカテゴリー化はどこまで妥当なのか。そもそもカテゴリー化する発想は本質主義的であり、ナショナリズムと直結しまいか。リベラル民主主義国家では国民に対し個人として形式的平等を担保するべきであり、デュボイスのことばに残響する歴史への拘泥は、社会正義を達成させるどころか、その達成をより困難なものにするのではなかろうか。

グアテマラ国家庁舎前でのマヤ儀礼。内戦の記憶は忘却の淵にある（グアテマラ共和国、2003 年、太田好信撮影）。

代表者であるわたしは、人種を政治的分類として捉えていたデュボイスから、歴史の中で思考することの重要性を学んでいる。しかし、デュボイスの主張を翻訳すれば、文化人類学はコロニアリズムの中で成長を遂げてきた学問であるから、その歴史の中から考えるとき、わたし自身デュボイスと同じ立ち位置から考えることは許されない。フランス文学者である鈴木道彦は、フランス留学中に「アルジェリア紛争」を目撃した経験から、1960 年代の一時期、「他者、他民族の目に映る日本人としての私」を意識し、植民者の一員として在日に対峙する際に、自らの「民族責任」を自覚したと述べている（鈴木 2007:46）。

マリノフスキー以来、フィールド調査や民族誌の記述を支えてきたのは、「現地の人びとの視点から」という倫理である。それが 21 世紀において翻訳され、新たな意味を獲得しているとすれば、コロニアリズムの歴史の中で分断された存在と相対（あいたい）することがその１つである、とわたしは考えている。

歴史の中で相対する倫理に向けて

ジェイムズ・クリフォードは、脱植民地化は１回限りの政治的出来事ではなく、再創造されるプロセスであり、反復される歴史を名指すと指摘している（Clifford 2012: 425）。そのような事例としてにわかに浮上してきたのは、21 世紀になり一層活発になってきた先住民（indigenous peoples の訳）の活動である。（先住民の台頭を促す要因には、ネオリベラル経済体制も大きく寄与しているのは、論を待たない［Comaroff and Comaroff 2009］。）たとえば、日本国内における先住民とはアイヌだけではない。琉球民族を先住民として認めるように求める勧告が国連から日本政府に向けて複数回出されている。これら一連の脱植民地化の活動に対し、沖縄県内からの反発もある。しかし、そのような反発の中にもコロニアリズムの傷痕を認めることができるため、歴

史の反復を否定することはますます困難である（親川 2016: 217）。

この共同研究のテーマが既視感をもって迎えられたとすれば、その理由はわたしたちが脱植民地化という再創造されるプロセスへの対応をいまだに求められているからに過ぎない（太田 2003: 252）。編者の一人クリフォードは、『文化を書く』（Clifford and Marcus eds. 1986）は、60 年代から継続してきた脱植民地化とフェミニズムへの応答であったと回顧している（Clifford 2012: 417）。日本においても米国と同様に、『文化を書く』について丁寧な再評価が待たれる。わたし自身は、この編著に代表される 1980 年代の米国における人文学から、解釈学的であり、政治的であり、そして倫理的である知の可能性を学んだ。その中でも、今回の共同研究を通し追究してみたいのは、倫理である。

倫理とは、個人に内在する意識であるが、それを学問の一部に反映することはできないかと思い描いている。植民者と被植民者とが、（フロイド・ウェスターマンが人類学者を揶揄する「人類学者がやってくる」という歌にあるように）コロニアリズムにより分断されたそれぞれの立ち位置から、分断を修復し共存に向けてともに努力すれば、すなわちポストコロニアルになろうと努めれば、異なった経路になろうとも、歴史へと立ち返る歩みを進める必要があろう。過去に立ち返ることにより開かれる未来もあるに違いない。

Floyd Red Crow Westerman の “Going Back” Yesterday, Today and Tomorrow（Red Crow Creations US0170-2）の CD カバー。8 曲目に「人類学者がやってくる（Here Come the Anthros）」が入っている。

文化人類学の主流にはならないかもしれないが、その一部にはコロニアリズムの歴史において植民者として被植民者に相対する倫理が内在していることを示したい。それは、植民者として文化人類学者を被植民者の声に耳を傾けるように導くだろう。また、それは現在の政治的アクターとして過去に対して担う責任の表明を促す。相対する倫理が、現地の人びとの視点からというマリノフスキーから相続してきた倫理の 21 世紀における意味であるのなら、その倫理は文化人類学にとって疎遠なものではないはずである。

相対を困難にするわたしたちの世界

相対する倫理について考察することを困難にする要因もある。文化人類学ではすでに自らが生活する社会と研究対象の社会との距離を埋めるさまざまな実践や理論構築が試みられてきた。しかし、コロニアリズムの歴史において自らが植民者集団の一員として現在の被植民者の末裔と相対してきたことは稀である。歴史に対する責任を意識せざるを得ず、その結果葛藤や緊張が支配する関係を避けてきた場合が多い。たとえば、コロニアリズムは多様なエイジェントをつくり出したという事実をもって、自らの責任を否定するというように。歴史における相対を求める声は、集団の一員であるという理由で、個人の責任を超え過去に対する責任を要求する。相対を求める発話者にとり、現在において個人の責任を強調する立場は、分断と対立を含む過去を忘れるという点で、ご都合主義に聞こえよう。

相対する倫理とは、これらの声への応答である。コロニアリズムの歴史の中で文化人類学が成立しているとすれば、その歴史の中における自らの立ち位置を自覚し、被植民者の末裔たちから発せられる要求をどのように受けとめることができるのか、どのようにその要求を文化人類学の理論構築に反映させることができるのか、という課題を考えることになろう。

21 世紀になり、過去の断片はわたしたちの意表を突くように回帰してくる。脱植民地化は先住民運動となり、再び文化人類学の歴史的立ち位置を問い直すかのようである。文化人類学は過去を甘受しつつも、その犠牲になるのではない方法で、未来に向かえるのであろうか。ポストコロニアルになることはできるのであろうか。本共同研究の最終目標は、これらの課題に挑戦することである。

【参考文献】

Clifford, J. 2012 Feeling Historical. *Cultural Anthropology* 27(3): 417-426.
Clifford, J. and G. Marcus (eds.) 1986 *Writing Culture: Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press.
Comaroff, John and Jean Comaroff 2009 *Ethnicity, Inc*. Chicago: University of Chicago Press.
Du Bois, W.E.B. 1987 [1940] *Dusk of Dawn: An Essay Toward an Autobiography of a Race Concept*. In Nathaniel Huggins (ed.) *Du Bois: Writings*. pp.549-808. New York: The Library of America.
太田好信 2003『人類学と脱植民地化』岩波書店。
親川志奈子 2016「人類館事件と豊見城市議会意見書」『世界』883: 216-217。
鈴木道彦 2007『越境の時──1960 年代と在日』集英社新書。

おおた よしのぶ

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。専門は、文化理論、先住民運動（とくにグアテマラ共和国・マヤ民族）。著書に、『増補版・トランスポジションの思想』（世界思想社 2010 年）、『亡霊としての歴史』（人文書院 2008 年）。編著に、『政治的アイデンティティの人類学』（昭和堂 2012 年）など。